

頸部捻挫施術の一考察

渡邊幸司¹⁾

1) 公益社団法人 岐阜県柔道整復師会 中濃地区

【はじめに】

頸部捻挫の患者に接するとき、回旋時痛を有していることが多い。頸椎運動に連動して、胸椎は頸椎の運動域を補う役割を有している。今回、胸椎に注目し施術を行うことで頸部回旋時痛の改善を図ることができたため、文献的考察に私見を加え報告する。

【対象と方法】

当院に来院された頸部捻挫の患者のうち、頸椎回旋時痛を訴えた 10 名(15～70 歳、平均 47.6 歳)を対象とした。10 名の初検時における回旋時の疼痛スコア(Numerical Rating Scale による)は、3～8 平均 5.8 であった。対象となった患者に対し以下のような施術を行い、再び回旋時の疼痛スコアを聴取し、初検時と比較を行った。

< 施術の方法 >

- ①上位頸椎の伸展を抑える為に有孔ベッドを使用し、患者は腹臥位とする。
- ②施術者はベッドの側方に立ち、一方の手を施術者から遠位となる側の大腿前面を内側から腕を回し把持する。もう一方の手は背部(対側の肋骨部～胸椎部)に置く。
- ③背部に置いた手を支点とし、大腿を持ち上げるようにして体幹の回旋と若干の伸展を他動的に促す。これを左右 1・2 回ずつ、少しずつ回旋を強めながら数セット行う。また、支点となる背部に置いた手も上下にずらしながら、なるべく広範囲の胸椎・肋骨の動きを改善するように努めた。

【結果】

10 人のうち、8 人の疼痛スコアに改善を認めた。8 人の改善度は 1～6(平均 3.0)であった。

【考察】

今回、胸椎椎間関節の可動性の向上を図ることで、頸部の回旋運動を助け、疼痛の改善がみられた。杉野らによると、頸椎における回旋は環軸関節がその大部分を担っており、左右合わせて約 80 度とされているが、この可動域は顎が上がるという胸椎部での円背の特徴的な姿勢に伴う上位頸椎伸展により制限されており、また、上位胸椎は頸椎と連続性のある運動を起こすことによって、頸椎運動を補足している¹⁾と述べている。今回、腹臥位での施術を考案し、胸椎の任意の部位に施術者の手を置いて支点とすることで、よりの確な胸椎部での回旋を可能としたことに加え、上位頸椎の伸展を抑えることで、環軸関節でのスムーズな回旋を促すことが可能となった。

石井によると胸椎の回旋制限は、胸椎椎間関節の可動性低下だけでなく肋骨の可動性の低下によっても生じる²⁾と述べており、胸椎・肋骨の可動性の制限に関わる筋は広範囲に多岐に渡るため、胸椎椎間関節の可動性向上を図る施術を考える上では、胸郭を含め体幹全体の動きを促すことも重要であると考えられた。

農端によると、形態から推測できる胸椎の回旋可動域は上位胸椎で大きく下位胸椎では小さい(回旋可動域は T1-9 で均一に働き、T9/10, T10/11, T11/12 では小さい)。そして腰椎の回旋可動域はさらに小さい³⁾としており、脊椎下位側から他動的に回旋を加えた場合でも、その回旋力を腰椎で大幅に吸収されることなく、胸椎へ伝えることが可能であると推察される。胸椎の回旋可動性向上のために体幹を他動的に回旋させる際、体幹上方向から回旋させると頭部も同時に動かさなければならず、頸部へ負担を与える

ことなく施術を行うことが難しく、患者の協力も必要となる場合が多い。しかし今回の方法であれば頭部を動かす必要がなく、頸部への負担が小さいと思われる。

今回この方法での施術を行った結果、多くの患者に頸部回旋時痛の改善がみられたが、その度合いは個人差が大きくみられた。これは、各個人の基礎的な胸椎部での回旋可動域低下の度合いが影響していると推察された。また、今回の方法で施術中に頸部痛を訴える患者はほとんどみられなかった。しかし、腰背部の伸展時痛を併発して訴える患者に対しての使用には注意が必要であると考えられる。

【まとめ】

- ・頸部回旋時痛を訴える患者に対して、胸椎椎間関節の回旋を促すことで、疼痛の改善がみられた。
- ・腰椎を介して回旋を加えることにより、患部に負担の少ない施術が可能であった。
- ・基礎的な胸椎椎間関節の回旋可動性により、施術効果に差がみられた。
- ・患部のみにとらわれず、視野を広く持って施術を行うことの重要性を再確認できた。

【参考文献】

- 1) 杉野伸治 ほか：第 8 章 4 アッパーコアの運動学と機能異常，コアセラピーの理論と実践，蒲田和芳，第 1 版，講談社，東京：158-166，2011
- 2) 石井慎一郎：Ⅲ寝返り動作の分析 5 動作のメカニズムを阻害する原因を推論するための評価，動作分析 臨床活用講座 バイオメカニズムに基づく臨床推論の実践，石井慎一郎，第 1 版，メジカルビュー社，東京：64-80，2013
- 3) 農端芳之：第 1 章 関節運動学 4 体幹の関節，関節運動学的アプローチ—博田法，博田節夫，第 2 版，医歯薬出版株式会社，東京：39-57，2007